

西川 しずか（慶應義塾大学）

5月16日(金)14:35-15:15 小野記念講堂 第二分科会

シュテューデル美術研究所収蔵サンドロ・ボッティチェッリ《女性の肖像》
—髪飾りの象徴性とメディチ家—

1480年代に制作されたサンドロ・ボッティチェッリ（1444/5-1510）と工房による5点の横顔の肖像は、同一の女性を表わすとされるほど、構図、像主の容貌、衣装において類似が見られる。しかしながら、フランクフルト・アム・マイン、シュテューデル美術研究所の《女性の肖像》には、ベルリン（国立絵画館）、ロンドン（ナショナル・ギャラリー）、東京（丸紅コレクション）、オックスフォード（アシュモリアン美術館）に所蔵される他の4点には描かれていない、ロレンツォ・デ・メディチ（1449-1492）が1487年に購入した古代彫玉《アポロとオリュンポスとマルシユアス》（ナポリ、考古学博物館）を表わしたペンダントと、金と赤い宝石がバラを模る羽根のついた髪留めが見られる。メディチ関連の証左とされるなど積極的な議論の対象とされてきた古代彫玉のペンダントに対して、バラを模る髪留めに言及する論考は無いに等しい。本発表は、等閑視されてきたこの髪留めがメディチ家、特にロレンツォと密接に結びつく事を指摘し、その象徴性の解明をとおして本作品の主題について新たな解釈を試みることを目的とする。

まず、この髪留めがメディチの表徴であることを明らかにする。メディチ家では金地に赤い球を配する紋章以外にも様々な表徴が使われていた。ボッティチェッリの《パラスとケンタウロス》（フィレンツェ、ウフィッツィ美術館）のパラスの衣装を飾る指輪はその一例であるが、本作品の髪留めは、メディチ邸（フィレンツェ、メディチ・リッカルディ宮）のファサードや扉飾りなどに見られ、メディチの表徴とされるバラであると考えられる。また、この髪留めは1464年のロレンツォの父ピエロの財産目録に記載される、バラを模るパラス・ルビーのブローチであるという仮説を本発表で初めて提示する。

続いて、ロレンツォと弟ジュリアーノの馬上槍試合の記録の比較から、バラがロレンツォとゆかりの深いモチーフであると指摘する。更に、宝石を星辰の力の媒介物とするメディチ派の人文主義者マルシリオ・フィチーノの著作『三重の生について』を検証する。ロレンツォに献呈されたこの著作では、金と赤い宝石は太陽を象徴し高貴さや名声をもたらすと言及されるが、ロレンツォは詩作の中で月桂樹^{ラウロ}と称され太陽神アポロはロレンツォを象徴することから、そのシンボリズムにおいても髪留めはロレンツォを暗喩することを示唆する。最後にフィチーノが参照していたとされる魔術書『ピカトリクス』に示されるヴィーナス^{ヴィーナス}の図像と類似することから、本作品はフィチーノが太陽の力とともに重要であると述べる金星^{金星}として表わされ、その宝石の象徴性から名声を意味すると結論付ける。